

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第166号

イザヤ 65:1

平成21年7月31日

イエスはたとえによって多くのことを教えられた……「よく聞きなさい。種をまく人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。また別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったため、すぐに芽を出した。しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。また、別の種が良い地に落ちた。すると芽ばえ、育って、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。」そしてイエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」……種蒔く人は、みことばを蒔くのです。みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです—みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。もう一つの、いばらの中に種を蒔かれるとは、こういう人たちのことです—みことばを聞いてはいるが、世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。よい地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちです」

マルコ 4: 2-20

救い、贖い、神の国の奥義について教えられたとき、キリストは「種蒔きのたとえ」を用いられました。「彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため」と、イザヤ書からの引用で、「たとえ」は、だれでも理解できるように語られるのではなく、神のメッセージに耳を傾ける者だけが理解できるように語られると前置きされた後、キリストご自身がたとえの意味を弟子たちに解き明かされました。蒔かれた種は御言葉ですからすべて良い種です。にもかかわらず、このたとえでは結果は四通りで大きく違ってしまったのでした。なぜこのように大きな差ができてしまったのか、その鍵は「聞く」という言葉にあるようです。旧新約全聖書に一貫して流れているテーマは「聞かない神の民、イスラエル」です。神の選びの民でありながら、神の御言葉に耳を傾けようとしなかったイスラエルは神の言葉を理解することができないまま、今日に至っているのです。同じことがキリストを信じる神の共同体、教会にも言えるのです。自称信者であってもキリストの教えを理解することができなければ、実を結ぶことはないのです。しかし、神の言葉を理解することのできた者は、多くの実を結ぶことが約束されているのです。「**耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい**」は、甦り後のキリストが愛弟子ヨハネに示された啓示の中で、小アジアにある七つの教会の各々に向けて語られた警告でしたが、この警告は後世のキリスト者すべてに語られています。

世の終わりに、神は、多くの実の収穫を刈り取ることを楽しみにしておられます。主の視点から見れば、神の言葉を受け入れ、理解し、実を結んだ多くの者たちを御許に引き寄せること、すなわち、多くの者の救いが期待されているのです。同時に、このたとえには、神の収穫を妨害する者のいることが描かれています。キリストがはっきりと指摘されたように、サタンです。御言葉を、聞いた者たちの心から奪う役割を担っているのはサタンの手下の悪霊どもで、イエスのたとえの中では、鳥にたとえられています。イエスが語られた「からし種のたとえ」:**「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります」**(マタイ 13: 31-32) にも、神の御国の働きを妨害する悪霊どもが鳥として描かれています。良い麦と同時に生長する毒麦のたとえ、三サトンの粉の中に混ぜられ、もはや取り除くことができないほどに膨れ上がったパン種(「イースト」は悪、罪の象徴)、海におろして引き揚げた地引き網の中に混ざっている良い魚と悪い魚等々、キリストが語られた「神の国のたとえ」のすべてに共通して描かれているのは、神の言葉に忠実な者たちの成長と同時進行で、サタンの暗闇の王国の働きが妨害的に繰り広げられているということです。食い尽くすものを捜し求めて、地の表面を行き巡り、徘徊している空中の支配者サタンが、この世の諸事に介入し、神の御国の働きを妨害していることは明らかです。神への反逆のゆえ、墮天使とともに天界から投げ出されたサタンが力を発揮できるのは、誘惑に負けて、サタンと同じように神に反逆する者となってしまった人間の住むこの世しかないのです。

キリストは、地上での宣教を始められる直前、サタンの試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に行かれました。四十日四十夜断食され、空腹を覚えられたイエスに対しサタンは、人間が一番畏れに陥りやすい三つの領域、一物質の満ちし、自尊心の満ちし、存在価値の満ちし—に挑戦しました。この最後の挑戦でサタンは「**イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。『もしひれ伏して私**

を拜むなら、これを全部あなたに差し上げましょう』と、この世の権威を振りかざして、イエスに挑んだのです。ここでサタンは、自分の言うなりになるなら、この世をすべてイエスにあげると豪語していますが、この挑戦は、この世がサタンの支配下に置かれていることを明らかにしています。もし、そうでなければ、意味を成さない挑戦ということになるからです。実際、この世はサタンの支配下に置かれたのです。そのことを神はお許しになったのでした。しかし、神の御子、キリストは、天の御使いを呼んですぐにでもサタンの手からこの世を奪い返す方法をとることができたにもかかわらず、「引き下がれ。サタン。『あなたの神である主を拜み、主にだけ仕えよ』と書いてある」と申命記からの引用でサタンに命じられ、父なる神の御旨に従うのがご自分の使命であることを明らかにされたのでした。言い換えれば、神の計り知れないご計画に従って、贖い主としてこの世を取り戻す方法を自ら選ばれたのです。力づくで、この世を悪しき者の手から奪い返すのではなく、神の御国を相続するにふさわしい合法的な世継ぎ、油そそがれた王、メシヤとして、この世を取り戻すために、イエスは「苦難のしもべ」としての道、十字架の道を選ばれたのでした。

このようにサタンは、今日も神の遠大なご計画が成就しないようにありとあらゆる手を尽くして、妨害の策略を練っています。「御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは感わず霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。神のことばと祈りとによって、聖められるからです」(テモテ第一 4:1-5) と、パウロは、初代教会の時代すでにキリストの共同体に忍び込んでいた神の備えや秩序を疑問視したり禁じたり変えたりする偽りの霊、悪霊の教えに言及していますが、過去の教会史において、貪欲、強欲、権力、権勢、傲慢、誇り、理知はパン種のように教会組織の中にはびこって来たのでした。これら人を魅了してだます霊、悪霊のもたらす教えは、キリストが教え、実践された福音とは正反対に、人を罪の隷属下から解放するどころか、サタンの支配下に隷属させる滅びへの招きなのです。

先月号で触れましたが、大気汚染、悪化によって人間生活が脅かされていることを印象づける風潮やオゾン層破壊と皮膚癌や白内障の増加との関連づけ、二酸化炭素や温室効果ガスの増加による「地球温暖化説」などは、二十、二十一世紀にサタンが新しく編み出した策略といえるかもしれません。父なる神の定めるときまでは、神が御使いを送って日夜、空中の支配者サタン、墮天使の手から地球を守ってくださるということを知ることでできない人々は、この世の新説に説き伏せられて、間違った方向性を持ってしまうことになるかもしれません。しかし、神の言葉を理解し、神の御旨を正しく知ることのできる者は、そのような新説におびえ、この世の指導者が提供する解決策に迎合する必要はないのです。イエスが愛弟子ヨハネに示された啓示の中で、買ったり売ったり日常生活をしていくために必要な「獣の刻印」を受けさせられる時代に、キリストの忠実なしもべはその刻印を受けてはならないという警告と、「悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつ」として描かれている「大バビロン」に象徴される世界経済、政治、宗教統一機構の一環を担ってはならない、「わが民よ。この女(バビロン)から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないため」(黙示録 18:4) という警告は、まだこれから成就することになる預言です。終末の末期に生きている私たちは意味を正しく理解してこの警告を銘記し、罠に陥らないようにしなければならないのです。

この空中の支配者サタンと神の御子キリストとの決着は、十字架上で亡くなられたイエス・キリストが三日目に甦られたという驚くべき出来事によってすでにつけられたのですが、したがって、キリストを信じる者たちはすでにサタンに打ち勝つ権威を授かったのですが、このことが地上に生きるすべての者の目に明らかになるのは「ハルマゲドンの戦い」においてです。主に反逆する者、サタンの体制に属する者たちが裁かれ、滅ぼされる「主の再臨」のとき、誇り高きサタンにとっては致命的ともいえる出来事が起こります。「私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています.....主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一っしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります」とパウロが教えた「携挙」です。これは、再臨のキリストが信じる者たちを生きのまま空中に引き上げてくださる、その瞬間に、信者が滅びの身体から甦りの身体に、すなわち、肉体の死を経験しないで永遠に生きる身体に変えられるという、メシヤの時代に入る直前にこの世に生きているキリスト者だけが味わうことになる特権です。すでに二千年間、信じる者たちはこの成就を待ち望んできました。しかしここで、キリストが神の民を集める場所をサタンの本拠地「空中」にされたということは象徴的です。そのとき、ご自分の民を従えたキリストはサタンを空中から追い払われることを意味するからです。